

こもれび 武蔵野市社会教育委員だより

発行日：令和4年2月1日

編集：社会教育委員の会議

発行者：武蔵野市教育委員会

市ホームページではカラー版が
ご覧になれます（右記QRコードから）



武蔵野市社会教育委員だより

令和4年2月1日 第11号

管内研修レポート

令和3年9月30日（木）、コロナ禍における武蔵野市内施設の対応、現状と取り組みを知るため、市内4施設を視察しました。



学校給食桜堤調理場

中学校6校と小学校2校の給食2,852食を今年の8月30日（月）から提供開始した桜堤調理場。

午後の視察だったため、調理はすでに終了し、きれいに片付けられた状態の調理室でした。

建物は3階建てで1階に調理室、2階に地域の食育ステーションや見学者ホール、事務室、3階に洗浄スペースとアレルギー対応の調理室があり、各区域がきちんと分けられています。調理工程で床の色を分け、衛生管理が徹底されていました。多くの子どもたちが口にする学校給食ということで、新型コロナだから特別な配慮を、というより元から衛生管理には細心の注意が払われていました。

また、災害時にも非常用電源や受水槽、プロパンガスを常備しており、炊き出しなどの対応もできるように作られており、有事の際には心強いです。

食育ステーションにはカメラが設置された調理台があり、手元を画面に映しながら調理を行えたり、動画撮影やリアルタイムでの配信も出来そうな設備を備えておりました。講義スペースも設けられており、今後、食育や食に関するイベント・講座などが行われることが期待されます。



食育ステーション



むさしの自然観察園

市役所の北側、四中前の通りを東に進み、成蹊大学の北側にあり、NPO法人武蔵野自然塾が管理する『むさしの自然観察園（北町ビオトープ）』。

園は管理棟が1棟あり、常緑樹の林、里山の林、トンボ池、ケージと分かれ、それぞれ特徴のある魅力的なエリアになっています。ケージでは蛍も飼育され、夏の前には蛍の観察会も開かれています。それほど広くはない敷地ですが、これほど多種多様な植物や昆虫がいるのかと驚かされます。

コロナ禍では各種イベントは行えないことが多かったものの、外出先が制限されていたこともありたくさんの方が訪れたとのことでした。こうした自然を感じる事の出来る場所は、子どもたちのために今後より大切になっていくと感じました。（上澤 進介）



管理棟で説明を受ける様子



武蔵野クリーンセンター・むさしのエコレポート



クリーンセンターはゴミ処理施設です。市内でゴミを集めた収集車は、クリーンセンターの地下に入り、ゴミをピットに投入します。ピットに投入されたゴミは、クレーンによってかき混ぜられ、炉に投入されます。低温だと有害物質が排出される可能性があるため、炉ではゴミを850度を超える高

温で焼却します。ところで、ゴミには湿った生ゴミもあれば、晩秋、雨の翌日には雨に濡れた落ち葉が大量に持ち込まれます。湿ったまま炉に投入すると炉の温度が下がるので、ピットのゴミはクレーンで持ち上げては落とし、かき混ぜてできるだけ乾燥させます。ゴミが収集車から投入される場所から炉に投入される場所まで、また職員の方が炉の管理をしている様子も、開館時間中はいつでも見学することができます。クリーンセンターの屋上は、半分が畑、半分が自然のままに植物が生い茂るスペースとなっていて、ここのところ毎年、カルガモも来て産卵し、子育てしているのだそうです。

ところで、現在のクリーンセンターは2017（平成29）年に稼働を始めた二代目です。それまで使われていた初代クリーンセンターの建物を、幅広い市民が参加して生まれ変わらせ、再利用して作られたのが環境啓発施設むさしのエコreゾートです。クリーンセンターであった時期の構造を一部残しています。私たちが伺ったとき、エコreゾートは新型コロナウイルスワクチンの集団接種会場になっていて、1階のスペースを見学することができませんでした。このスペースには、学校の机を利用したボルダリング設備や、さまざまなものをリサイクルして工作ができる「ものづくり工房」があります。研修後に再訪したところ、1階スペースも再開され、多くの子どもたちが訪れて楽しく遊んでいる姿を見ることができました。また、閉園した泉幼稚園の蔵書が寄贈されて子どもたちに（大人たちにも）読まれています。このこと自体が「環境」について考えるきっかけになるだろうと思われま



見学模様



クリーンセンターもエコreゾートもさまざまな市民活動の場となり、ここからさまざまなつながりが生まれています。どちらの施設も市の社会教育にとって貴重な場になっています。それをさらに育て、つないでいくことがこれからの課題になると思います。（光田 剛）

全国社会教育研究大会石川大会

例年は二日にかけて行われる全国社会教育研究大会。その第63回石川大会が令和3年10月28日（木）に配信で開催されました。朝の10時から午後5時近くまで盛りだくさんの内容を一日で、それもオンデマンド配信で行われました。運営の方々は大変だったと思います。しかしながら長丁場ではありましたが、配信というカタチでの大会開催はとても有意義に思えました。アフターコロナでもぜひ続けてほしいところです。

今大会、午前中が事例発表、午後は子供歌舞伎「勸進帳」による歓迎アトラクション。そして表彰式、記念講演「(株)ヤマト醤油味噌 代表取締役の山本晴一氏による“御御御付けと腸を考える”」、シンポジウム「人びとが豊かに暮らすまちづくりを目指す 新たな学び」といった内容でした。なかでも子どもたちによる「勸進帳」は圧巻でした。開催地の小松市は、勸進帳の舞台となった地でもあり、市内の小学校では子供歌舞伎が必ず行われるそうです。弁慶の「智」、富樫の「仁」、義経の「勇」が描かれていることから「智仁勇」が古くから大切に受け継がれているそうです。こうした各地域ならではの、その地に根付いた文化を知る



ことも全国大会の醍醐味と言えるかもしれません。「智仁勇」つまり、判断力、誠実さ、行動力というものがこれからの社会教育委員の地域課題解決、そして地域の未来をつくるための挑戦に役に立つのではないかとの話にも納得できるものがありました。また、今大会のスローガンで心に残ったものに「今こそ攻めの社会教育を！」がありました。武蔵野市の今後の社会教育においても、大いに参考になるスローガンではないでしょうか。（秋山 聡）

■ 関東甲信越静社会教育研究大会東京大会 ■

令和3年11月11日（木）に府中の森芸術劇場で開催された第52回関東甲信越静社会教育研究大会東京大会に社会教育委員6名で参加しました。

開会前のアトラクションとして「元気一番！！ふちゅう体操」から始まりましたが、この体操は、介護予防に取り組むきっかけを作り、介護予防活動を楽しく継続して、元気に生活することを目的に「府中小唄」を体操用にアレンジしたそうです。

基調講演では、「みんながつくる〈社会〉へー人生100年、AI、そしてポストコロナ時代の社会教育ー」の演題で、東京大学教授 牧野 篤 氏が登壇され、「親ガチャ」の話題に触れられました。これまでは毒親のせいで容姿や環境が悪いなど諦めていたが、今では「親ガチャ」をしたのは自分だから、結局自分が悪いと全部引き取ってしまう「自分の境遇は自己責任」と言う考え方になっていると言う話にはとても考えさせられました。また、人々が自律し、自己肯定感を持ち、相手を慮（おもんばか）る気持ちが大切であり、自分が役に立っていることを感じるために、「学ばないではいけない社会」が重要だと話され、これが生涯学習なのだと感じました。

トークセッションでは、倉持 伸江（東京学芸大学准教授）氏をコーディネーターとして4名のパネリストによる、「今この時代でどのようにまちをつくり、共に生きる社会をつなげていくか」をテーマに、地域の「ため」と「したい」の割合が等しい相関でなければならない、ダメになるのは行政依存から悪循環になることが多い、日々忙しくなりづらいなど、自分の地域でも感じる問題と考えさせられました。



会場内の様子

（本郷 伸一）



東京都町村社会教育委員連絡協議会第5ブロック研修会

令和3年11月20日（土）はいまだコロナ禍蔓延の不安が残る時期でありましたが、三鷹、調布、小金井、府中、そして開催市の狛江、武蔵野市から計27名が参加しました。武蔵野市は来年ブロック研修会担当市ですので、気合いを入れ、委員4名、事務局2名が参加しました。

研修は深大寺の張堂興昭住職のご講演「住職が考える、コロナ禍における生活様式の変化」に始まり、その後、4グループに分かれて「新しい生活様式における社会教育の実践」について個人用アクリル板越しの討議が始まりました。今回の「コロナ禍」がもたらした困難と変化を踏まえて、これからすぐにやってくるであろう「Withコロナ」の下書きに思いを馳せる試みです。指摘されたコロナのマイナス点は、行事と計画の中止、新しい関係づくりの難しさ、消えてしまった高齢者と子どもの接点など、逆にプラスの点は、オンラインが進んだからこそ気づけた時間や移動のコストの大きさ、増えた家族との時間、直接会って話すことの新しさ、などです。来年度はこの議論を引き継ぎ、Withコロナ時代をリードする研修を開催できるようこれからの社会教育会議で検討していきたいと考えています。



議長挨拶

住職のご講演の後で調べましたが、伝教大師（でんぎょうだいし）とは天台宗の開祖に最澄に贈られた称号だったのですね。資料には本年が1200年大遠忌であることと「己を忘れて、他を利するは慈悲の極みなり」の言葉が印象に残りました。近年、私が注目している「自他不二」の言葉にもつながります。一つ一つのつながりを大事にしていきたいと思います。（板垣 文彦）

東京都市町村社会教育委員連絡協議会第3ブロック研修会



コロナ禍のなか、対策をしっかりして、令和3年11月12日（金）、第3ブロック研修会が開催されました。講演された伊藤香織氏の「地域の学びとシビックプライド」は、とても興味深い内容でした。シビックプライドとは、「ここをより良い場所にするために、自分自身が関わっているという意識を伴う当事者意識に基づく自負心」ということでした。確かに、自分自身が積極的に地域のことに関わることで愛着心が生まれ、自分を含めて、その地域でのコミュニティの意欲を高めていく原動力となりえる。そして、コミュニティの結束が生まれ、地域の活性化につながっていくのだということはわかる気がしました。地域の活性化に必要なことは、「まちと私の関係を築いていくこと」が大切で、そのためには、「まちを知る」ことが重要。イギリスのオープンハウスや大阪のミュージアムフェスティバルなどの事例紹介がありました。まちを知るとまちで何をすべきかわかってきて、自分の行動につながり、表現をすることで自己実現にもなり、それが、まちの個性となっていくという新潟やデンマークのオープスの活動を紹介していただきました。

続いて稲城市から、武蔵野市でいう親父の会的な存在の「いなちちの会」と「社会教育委員の会」の発表がありました。「いなちちの会」は、「攻略、いなぎ城」という、すべて手作りの忍者イベントで、1,000名もの子どもたちが参加する活動をしていました。地域に活用できる歴史があるのは羨ましいかぎりです。「社会教育委員の会」は、市の良いところを次世代につなぐために、再発見（掘り起こす）、活用（磨きをかける）、継承（繋げる）していく活動を「教育、文化活動」「文化財、歴史」「自然」の3つのカテゴリーで紹介していただき、10年も20年先の未来も住み続けたいまちにしたいという思いがよく伝わってきました。地域愛にあふれ、すでにシビックプライドを実践している良い事例だったと思います。地域を思う気持ちが、良いコミュニティ、良いまちづくりにつながっていくということが良く理解できた研修会でした。（白田 紀子）

東京都市町村社会教育委員連絡協議会交流大会・全体研修会

令和3年12月11日（土）に府中市において、令和3年度交流大会・社会教育委員研修会が開かれました。

「明日に向け 学びの輪を広げよう！！ ～地域の魅力 グローバル社会で再発見～」と題したこの交流会では、第一部として、第52回関東甲信越静社会教育研究大会東京大会の実践報告がありました。

その後、コロナ禍により当日発表できなかった5ブロックの活動が紹介されました。各地区の伝統文化を継承していくことや地域コ

ミュニティ活動を持続させる取り組み、コロナ禍での実践事例などの紹介がありました。まとめの中で、「一緒に学ぶことで、豊かな地域が作られる。それが次の世代につながる」などと、東京大会基調講演の話にも触れられました。

第二部として「郷土芸能を地域で受け継ぎ、発展させる～武蔵国府太鼓の紹介とインタビュー



武蔵国府太鼓

トーク～」として、ビデオによる武蔵国府太鼓の曲紹介と演奏メンバーとの質疑・応答がありました。登壇した5名のメンバーから、この和太鼓市民グループとのつながりを大切にしている話などを聞くことができました。また、幼児期より和太鼓に親しみ、現在中学生の奏者からの発言もあり、地域に生まれ、強いつながりが広がっている様子が伺え、参考となる研修会となりました。（河合 雅彦）



資料を確認